

連続の式

春日 悠

2009年4月15日

目次

1 物質表示の連続の式	1
2 空間表示の連続の式	2
3 物質表示から空間表示へ	3

1 物質表示の連続の式

物体 B があるとする．ある時点を時間 $t = 0$ とし，そのとき B を構成する点の位置ベクトルを X としよう．その後 B が変形したとして，そのときの B の点の位置ベクトルを x とする． B の変形前後の微小ベクトル dX, dx は次式で関係付けられる．

$$dx = F \cdot dX \quad (1)$$

ここで F は変形勾配テンソルであり，その成分は

$$F_{ij} = \frac{\partial x_i}{\partial X_j} \quad (2)$$

である．

さて，変形前の B の占める領域を Ω_0 ，変形後のそれを Ω としよう．変形前の B の微小体積を dV とし，変形後のそれを dv とする．また， B の点 X の時間 t における密度を $\rho(X, t)$ とし，変形前の B の密度を $\rho_0 = \rho(X, 0)$ ，変形後のそれを $\rho = \rho(X, t)$ とすると， B の質量 m は次式で表される．

$$m = \int_{\Omega_0} \rho_0 dV = \int_{\Omega} \rho dv \quad (3)$$

変数変換により

$$\int_{\Omega_0} \rho_0 dV = \int_{\Omega_0} \rho J dV \quad (4)$$

ここで, J はヤコビアンである. 上式より次式が得られる.

$$\rho_0 = \rho J \quad (5)$$

この式を連続の式といい, 質量保存の法則を表している.

変形後の B の内部の微小ベクトルを dx, dy, dz とし, それらが作る六面体の体積が dv であるとしよう. 一方, 変形前の B の内部の微小ベクトル dX, dY, dZ が作る六面体の体積を dV とする. 3つのベクトル a, b, c が作る六面体の体積は, スカラー3重積

$$|a \ b \ c| = a \cdot (b \times c) = \epsilon_{ijk} a_i b_j c_k \quad (6)$$

で表される. ここで ϵ_{ijk} はエディントンのイプシロン

$$\epsilon_{ijk} = \begin{cases} 1 & (i, j, k \text{ が } 1, 2, 3 \text{ の偶置換}) \\ -1 & (i, j, k \text{ が } 1, 2, 3 \text{ の奇置換}) \\ 0 & (i, j, k \text{ のうちどれか2つが等しい}) \end{cases} \quad (7)$$

である. 総和規約を用いている. スカラー3重積を用いて

$$\begin{aligned} dv &= |dx \ dy \ dz| \\ &= |F \cdot dX \ F \cdot dY \ F \cdot dZ| \\ &= \epsilon_{ijk} F_{il} dX_l F_{jm} dX_m F_{kn} dX_n \\ &= \frac{1}{6} \epsilon_{ijk} \epsilon_{lmn} F_{il} F_{jm} F_{kn} \epsilon_{lmn} dX_l dY_m dZ_n \\ &= \det F |dX \ dY \ dZ| \\ &= dV \det F \end{aligned} \quad (8)$$

これより $J = \det F$ が得られる. ここで $\epsilon_{ijk} \epsilon_{ijk} = 6$ および

$$\det F = \frac{1}{6} \epsilon_{ijk} \epsilon_{lmn} F_{il} F_{jm} F_{kn} \quad (9)$$

を用いた.

2 空間表示の連続の式

物体の存在する空間の密度場を考える. 空間の位置ベクトルを x とし, 時間 t における密度場を $\rho(x, t)$ で表すことにしよう. 空間のある点に微小立方体を考える. デカルト座標系が設定されているとして, 立方体の面は座標軸に平行であるとし, 軸方向の幅をそれぞれ dx, dy, dz とする. 今, x 軸に垂直な面2枚に注目し, 軸の負側の面を通る単位時間当たりの質量を \dot{m}_x^- , 正側の面のそれを \dot{m}_x^+ と表す. x 軸方向の物体の速度を u_x とし, 流束 ρu_x を ϕ_x と表すと, \dot{m}_x^-, \dot{m}_x^+ はそれぞれ次のようになる.

$$\begin{aligned} \dot{m}_x^- &= \phi_x dy dz \\ \dot{m}_x^+ &= \left(\phi_x + \frac{\partial \phi_x}{\partial x} dx \right) dy dz \end{aligned} \quad (10)$$

微小立方体から単位時間あたりに流出する x 軸方向の質量 \dot{m}_x は次式になる．

$$\begin{aligned}\dot{m}_x &= \dot{m}_x^+ - \dot{m}_x^- \\ &= \frac{\partial \phi_x}{\partial x} dx dy dz \\ &= \frac{\partial}{\partial x} (\rho u_x) dx dy dz\end{aligned}\quad (11)$$

y 軸方向， z 軸方向も同様に考えると，微小立方体の質量の時間変化率 \dot{m} は，次式で表される．

$$\dot{m} = \frac{\partial \rho}{\partial t} dx dy dz = -\nabla \cdot (\rho \mathbf{u}) dx dy dz \quad (12)$$

上式から

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \nabla \cdot (\rho \mathbf{u}) = 0 \quad (13)$$

これは，空間表示による連続の式である．上式を変形すると，次式が得られる．

$$\frac{D\rho}{Dt} + \rho \nabla \cdot \mathbf{u} = 0 \quad (14)$$

ここで，左辺第一項は ρ の物質時間導関数

$$\frac{D\rho}{Dt} = \frac{\partial \rho}{\partial t} + \mathbf{u} \cdot \nabla \rho \quad (15)$$

である．

非圧縮性をもつ物体の場合は，密度が変化しない ($D\rho/Dt = 0$) ので，連続の式は次式になる．

$$\nabla \cdot \mathbf{u} = 0 \quad (16)$$

3 物質表示から空間表示へ

式 (5) と式 (13) は，どちらも同じ質量保存の法則を表しているので，一方からもう一方を導くことができるはずである．ここでは，式 (5) から式 (13) を導いてみよう．

式 (5) はそもそも，物体 B の質量を m として

$$m = \int_{\Omega_0} \rho_0 dV = \int_{\Omega_0} \rho J dV \quad (17)$$

であったが， m の時間変化率 \dot{m} を考えると

$$\dot{m} = \int_{\Omega_0} (\dot{\rho} J + \rho \dot{J}) dV \quad (18)$$

ここで \dot{J} について考えよう．速度勾配テンソルを L とし，その成分を

$$L_{ij} = \frac{\partial u_i}{\partial x_j} \quad (19)$$

とすると, \dot{F}_{ij} は

$$\begin{aligned}
 \dot{F}_{ij} &= \frac{\partial \dot{x}_i}{\partial X_j} \\
 &= \frac{\partial u_i}{\partial X_j} \\
 &= \frac{\partial u_i}{\partial x_k} \frac{\partial x_k}{\partial X_j} \\
 &= L_{ik} F_{kj}
 \end{aligned} \tag{20}$$

である. $J = \det F$ より

$$\begin{aligned}
 \dot{J} &= \frac{\partial}{\partial t} (\det F) \\
 &= \frac{\partial}{\partial t} (\epsilon_{ijk} F_{i1} F_{j2} F_{k3}) \\
 &= \epsilon_{ijk} (\dot{F}_{i1} F_{j2} F_{k3} + F_{i1} \dot{F}_{j2} F_{k3} + F_{i1} F_{j2} \dot{F}_{k3}) \\
 &= \epsilon_{ijk} (L_{il} F_{l1} F_{j2} F_{k3} + F_{i1} L_{jm} F_{m2} F_{k3} + F_{i1} F_{j2} L_{kn} F_{n3}) \\
 &= \epsilon_{ijk} L_{il} F_{l1} F_{j2} F_{k3} + \epsilon_{ijk} L_{jm} F_{m2} F_{i1} F_{k3} + \epsilon_{ijk} L_{kn} F_{n3} F_{i1} F_{j2} \\
 &= \epsilon_{ijk} L_{li} F_{i1} F_{j2} F_{k3} + \epsilon_{imk} L_{mj} F_{j2} F_{i1} F_{k3} + \epsilon_{ijn} L_{nk} F_{k3} F_{i1} F_{j2} \\
 &= (\epsilon_{ijk} L_{li} + \epsilon_{imk} L_{mj} + \epsilon_{ijn} L_{nk}) F_{i1} F_{j2} F_{k3} \\
 &= \frac{1}{6} (\epsilon_{ijk} \epsilon_{ljk} L_{li} + \epsilon_{ijk} \epsilon_{imk} L_{mj} + \epsilon_{ijk} \epsilon_{ijn} L_{nk}) \epsilon_{ijk} F_{i1} F_{j2} F_{k3} \\
 &= \frac{1}{6} (2\delta_{il} L_{li} + 2\delta_{jm} L_{mj} + 2\delta_{kn} L_{nk}) \epsilon_{ijk} F_{i1} F_{j2} F_{k3} \\
 &= L_{ll} \epsilon_{ijk} F_{i1} F_{j2} F_{k3} \\
 &= \text{tr} L \det F \\
 &= J \text{tr} L
 \end{aligned} \tag{21}$$

ここで δ_{ij} はクロネッカーのデルタ

$$\delta_{ij} = \begin{cases} 1 & (i = j) \\ 0 & (i \neq j) \end{cases} \tag{22}$$

であり, $\epsilon_{ijk} \epsilon_{ijk} = 6$, $\epsilon_{ijk} \epsilon_{ijl} = 2\delta_{kl}$ であることを利用した. また, $\text{tr} L = L_{ii}$ は速度勾配テンソル L のトレースである.

したがって \dot{m} は

$$\dot{m} = \int_{\Omega_0} (\dot{\rho} + \rho \text{tr} L) J dV \tag{23}$$

質量保存より $\dot{m} = 0$, また

$$\begin{aligned}
 \text{tr} L &= L_{ii} \\
 &= \frac{\partial u_i}{\partial x_i} \\
 &= \nabla \cdot \mathbf{u}
 \end{aligned} \tag{24}$$

なので

$$\dot{\rho} + \rho \nabla \cdot \mathbf{u} = 0 \quad (25)$$

これより

$$\frac{D\rho}{Dt} + \rho \nabla \cdot \mathbf{u} = 0 \quad (26)$$

この場合の ρ は物質表示であるが，これを空間表示とみなせば，式 (13) が得られる．

参考文献

- [1] 石原繁：テンソル -科学技術のために-，裳華房 (1991) ．
- [2] 久田俊明：非線形有限要素法のためのテンソル解析の基礎，丸善 (1992) ．
- [3] Y.C. ファン：連続体の力学入門 改訂版，培風館 (1980) ．